

# 「混血児問題」における問題の所在

——1950年代初頭の雑誌、新聞、書籍における論争をめぐって——

神戸大学大学院 岡村兵衛

## 1 目的

この報告では、1950年代初頭に論じられた「混血児問題」論争について検討する。ここで「混血児」とは、日本の敗戦によって進駐して来た連合国軍兵士と、現地（日本）女性との間に生まれた人々のことを指す。「混血児問題」については加納（2007）やエリザベス飯塚（2009）、嶺山（2012）らによって言及されているが、それらは「混血児問題」における論点を一部分のみを取り上げるに留まっている。本報告では「混血児問題」において、何が問題とされたのかを整理し、これまで意識的に指摘されたことがなかった問題点について述べる。

## 2 方法

そこで、「混血児問題」を主に論じた雑誌を中心に、新聞、書籍のうちで可能なものを分析の材料とする。「混血児問題」をめぐる雑誌上の論争では『婦人公論』が中心的役割を演じ、その他『文藝春秋』や『改造』などでも言及された。新聞では、主に『朝日新聞』と『読売新聞』を資料とし、書籍では後に映画化された高橋節子『混血児』（1952）などを扱う。

## 3 結果

分析の結果、これまで「混血児問題」と一括りにされていたものは、戦争による「混血児問題」と、植民地統治と関わる「混血問題」とがあり、対象となる「混血児」も、「混血孤児」と養育者のいる「混血児」の区別があったが、それらは混同されていた。例えば、国立公衆衛生院長であり混血児問題対策研究会の委員だった古屋芳雄は「混血問題」を論じる立場から、「混血児」は社会のなかの「異物的存在」となり厄介な統治問題にまで発展するとして主張し、同じく委員であった神崎清や大宅壯一も英・仏・蘭領における「ユーラシアン（Eurasian）」を参照して「混血問題」を論じていた。一方で福祉の立場から論じられた「混血児問題」は、就学問題、扶養義務、養子縁組移民、母子の福祉についてだったが、それらにも他国の植民地統治の事例が少なからず影響を与えていた。

## 4 結論

以上から、「混血児問題」は、大別して戦後に生まれた「混血（孤）児」の福祉問題と、戦前からの植民地統治の問題である「混血問題」の2つがあったことが指摘できる。これまで、戦後の「混血児」を論じるにあたっては、連合国軍による占領のみが注目されてきた。しかし、福祉の現場にいた論者もヨーロッパ諸国の植民地統治の事例から「混血児」について論じており、それが重要な意味をもっていた。

## 文献

- エリザベス飯塚幹子, 2009, 「沢田美喜の「国際児」教育：「統合」・「分離」教育論争をめぐって」『キリスト教教育研究』26.
- 加納実紀代, 2007, 「「混血児」問題と单一民族神話の生成」惠泉女学園大学平和文化研究所『占領と性—政策・実体・表象』インパクト出版会.
- 嶺山敦子, 2012, 「戦後の「混血児問題」をめぐって—久布白落美の論考を中心に—」『社会福祉学』52 (4) .